

研究ノート

学生プロジェクトにおけるマネジメント研究

——プロジェクト参加動機の変移——

梶 本 伸 悦*

1. 背 景

21世紀の大学教育の大きな潮流として、人間力・社会人基礎力・サービスラーニング(Service-Learning)・PBL(Project-based Learning)といった専門知識以外の能力を高めるために、より実践的な教育プログラムを開始する大学が増えてきている。その背景として経済産業省は、「近年、産業競争力として『新しい価値のある商品やサービスをいかに早く創り出すか』が問われ、企業現場では、創出に向けた課題の発見、解決に向けた実行力、異分野と融合するチームワークなどの能力が強く求められています。他方、従来それらの能力を『自然に』磨く場であった家庭や地域社会、部活動や集団活動などにおける教育力は落ち込んでおり、『職場や地域社会で求められる能力』に係る需要と供給のバランスは大きく崩れています。いわば、これまで大人へと成長する過程で『自然に』身に付くと考えられていた『職場や地域社会で求められる能力』は、今、『意識して育成しなければいけない能力』になったといえるでしょう」と説明している¹⁾。

このような社会背景の中で、広島経済大学でも2006年度より人間力開発プログラムを開始している。この教育プログラムは、興動館教育プログラムと名付けられ、実践を通じて知識や能力を身につける「興動館科目」と、そこで培っ

た能力を行動することによって自らの成長につなげる「興動館プロジェクト」で構成されている。この2つが相互に作用し合い、密度の濃い学びを通じて、実社会で活躍するための「人間力」を育てている。特に興動館プロジェクトは、国際交流・社会貢献・地域活性・経済活動などの分野で、学生が企画や運営など全般において主体的に活動するといった取り組みである。

次に、プロジェクトに参加する学生の人数の変化について述べてみたい。図1は、プログラムが開始する前年の2005年度から2010年度までの興動館プロジェクトに参加した学生の人数の推移である。2005年から漸次的に学生数は増加してきていたが、2009年7月の約420人をピークに徐々に参加人数は減ってきている。2011年3月時点では、主催・公認・準公認を合わせて15のプロジェクトが活動しており、約250名の学生がプロジェクト活動を行っている。今後興動館プロジェクトが継続していくためには、プロジェクトに参加する学生の確保やプロジェクトに参加してもらうためのアプローチ方法の確立が喫緊の課題となっている。

2. 研 究 目 的

本研究は、プロジェクト活動を行っている学生を対象に、プロジェクトの参加動機がどのように変移してきたのかということを考察することで、今後の学生プロジェクトのマネジメントの改善に資することが目的である。特に参加動機に関しては、プロジェクトに参加する際、ど

* 広島経済大学経済学部講師

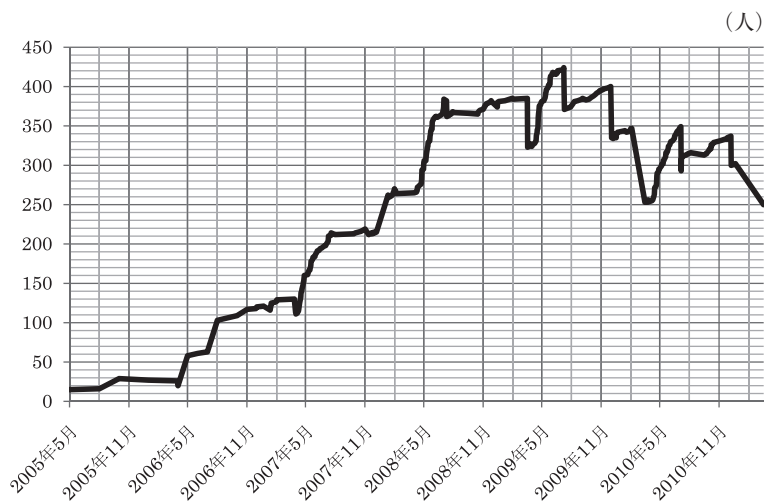


図1 興動館プロジェクトに参加した学生の人数の推移

のようなルートで勧誘されているのかというアプローチ方法と、どのような理由で参加したのかという2つの要素について分析をしたい。

3. 研究方法

広島経済大学興動館では、2007年度からプロジェクトに参加した学生は活動の終了時に個人報告書を提出することになっている。その個人報告書の内容は、「プロジェクト参加動機」「活動内容」「プロジェクトを通して学んだこと」の3つで構成されており、書き方は全て自由記述方式となっている。本研究では、2007年度から2010年度のおよそ4年間に提出された個人報告書、延べ669人の中の「プロジェクト参加動機」に注目し、その記述内容から、プロジェクトに参加する際のアプローチ方法と参加理由の内容を分析・考察する。

4. 考察

4.1 考察1

学生の個人報告書の中の「プロジェクト参加動機」を分析すると、学生へのアプローチに関する二つの要素が内包している。一つの要素とは、どのようなきっかけでプロジェクトに参加

することになったのかというアプローチの方法である。そして、もう一つの要素は、どのような理由でプロジェクトに入ることになったのかという参加理由に関することである。

まず本節では、アプローチの方法についての記述を分析し、11つの項目に分類した。分類した内容は、多い順に「自主的参加」「友人からの勧誘」「先輩からの勧誘」「興動館内での説明(スペシャルウィークや説明会)」「大学内での説明会(オープンキャンパス、入学前スクーリング、ガイダンス)」「教員の勧め」「大学の講義」「大学のパンフレット」「職員の勧め」「AOのため」「イベントや活動に直接参加」であった。

表1はプロジェクトの参加動機の変移の中のアプローチ方法についての分析結果である。2010年度のプロジェクトに参加するアプローチの方法として、最も多いのが自主的参加の41.3%、次いで、友人からの勧誘が18.8%、先輩からの勧誘が10.9%となっている。また、参加動機の推移としては、プログラムの初期である2007年度には、自主的参加が72.4%でその多くを占めていたが、その割合は年々減ってきている。その一方で、先輩からの勧誘や友人からの勧誘は初期に比べ約2倍になっており、大き

な伸びを見せている。その他注目すべきは、興動館内での説明が2010年度は10.1%ということである。興動館内での説明とは、毎年4月に興動館の2階を中心に新生入生を対象に、先輩がプロジェクトの説明をするイベントのことである。興動館では、このイベントのことをスペシャル

ウィークと名付けて、2006年度から実施している。期間はその年ごとで違うのだが、3日間から5日間の期間で開催される。その他にプロジェクトごとに独自でプロジェクトの説明会を開催する場合もある。少しずつではあるがこのような興動館での説明会が充実していることが

表1 プロジェクトの参加動機の変移 アプローチ方法

(%) ※少数点第2位を四捨五入

プロジェクトに参加したきっかけ	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
自主的参加	72.4	63.3	47.4	41.3
友人からの勧誘	10.5	11.4	17.2	18.8
先輩からの勧誘	5.7	7.0	10.9	10.9
興動館内での説明（スペシャルウィークやプロジェクトごとの説明会）	0	3.9	2.6	10.1
大学内での説明（オープンキャンパス、入学前スクーリング、入学後ガイダンス）	6.7	2.6	6.8	8.0
教員の勧め	1.9	6.1	4.7	5.8
大学の講義（入門ゼミ・演習ゼミ・講義）	1.9	1.7	1.6	2.9
大学のパンフレット	0	0.4	3.1	1.4
職員の勧め	0	3.1	2.1	0.7
AO のため	0	0	3.6	0
イベントや活動に直接参加	1.0	0.4	0	0

注）2007年度から2010年度までに興動館に提出された個人報告書をもとに作成

表2 プロジェクトの参加動機の変移 参加理由

(%) ※少数点第2位を四捨五入

プロジェクトに入ったきっかけ	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
活動内容への興味	53.3	60.3	61.5	54.0
行動への意欲	20.0	18.3	17.7	21.2
知識・能力の向上	18.1	14.0	13.5	10.9
先輩への憧れ	1.9	1.7	3.1	5.8
理由なし	2.9	2.2	2.6	3.6
雰囲気の良さ	1.9	1.3	0	1.5
興動館教育プログラムへの関心	1.9	0	0	1.5
就職に有利	0	0	0	0.7
広島経済大学らしい活動	0	0	0	0.7
地域への関心	0	0	1	0
人間関係の拡張	0	2.2	0.5	0

注）2007年度から2010年度までに興動館に提出された個人報告書をもとに作成

わかる。

4.2 考察2

考察2では、どのような理由で学生がプロジェクトに入るようになったのかという参加理由について考察したい。本節では、個人報告書から参加理由についての記述を分析し、11つの項目に分類した。分類した内容は、多い順に「活動内容の興味」「行動への意欲（何か活動をしたい・大学生活を充実させたい・色々なことを体験したい）」「知識・能力の向上」「先輩への憧れ」「理由なし（何となく）」「雰囲気の良い」「興動館教育プログラムへの関心」「就職に有利」「広島経済大学らしい活動」「地域への関心」「人間関係の拡張」であった。

2010年のプロジェクトに参加する理由として、「活動内容への興味」が54%で最も多く、次いで「行動への意欲」が21.2%、「知識・能力の向上」が10.9%の順になっている。参加動機の推移としては、年ごとに多少の変化はあるものの、項目の順序が変わるような大きな変化はない。また、徐々に増えてきているのは「先輩への憧れ」という理由であり、5.8%となっている。逆に減ってきているのは、「知識・能力の向上」の項目である。

5. 成果と課題

これまでの考察から、プロジェクトに参加している学生が経験してきた具体的なアプローチ方法と参加理由が明らかになった。このようなプロジェクトの参加理由やアプローチの変移から、次のような今後の課題が考えられる。

5.1 「自主的参加」の減少への対応

広島経済大学の教育目的は、2006年度から「ゼロから立ち上げる」興動人の育成となっている。この「ゼロから立ち上げる」興動人とは「既成概念にとらわれない斬新な発想と旺盛な

チャレンジ精神、そして仲間と協働して何かを成し遂げることができる力を備えた人材」のことである²⁾。特に興動館プロジェクトでは、学生一人ひとりの主体性がプロジェクトの活動においても最も重要視されているわけだが、本研究でプロジェクトに参加したきっかけで、最も多かった「自主的参加」の割合が減少してきたことが明らかになった。プロジェクトの初期はプロジェクト数も少なかったため、必然的に学生には自主的参加が求められたという見方もできるのだが、だからといって興動館プロジェクトの基本精神である主体性や自主性を軽視すべきではない。

このような状況の中で、今後はまだ興動館プロジェクトを経験していない学生に、少しでも自主的に関わってもらえるような対応が必要である。そのような意味で2011年度から開始する入門プロジェクトは、このような課題を解決する糸口になるかもしれない。この入門プロジェクトは、3名以上の参加者から気軽に始められる新しい制度のプロジェクトで、審査もできるだけ迅速に行われ、月報の提出や会議への参加の義務もない。また、活動期間は4月下旬から翌年3月31日までであり、募集も毎年4月1日から2月末まで随時ということで、学生が何か自主的にやってみたいという思いがあったらすぐに行動に移せる内容となっている。今後の学生の入門プロジェクトの活用期待している。

5.2 「知識・能力の向上」の減少への対応

興動館教育プログラムの特徴は、科目で学んだことをプロジェクトの場で実践したり、プロジェクトの場で学びの必要性を実感して科目を学んだりするという、プロジェクトと科目の双方向で有機的なつながりを意識していることにある。しかし、考察結果からプロジェクトの参加動機として「知識・能力の向上」への意識が徐々に少なくなってきたことが明らかになった。

この要因としては、プロジェクト活動を通じてどのような知識や能力が身に付くのかということが分かっていないということと、知識や能力を媒体とするプロジェクトと科目の関連性が明確になっていないことが挙げられる。

今後の対応として考えなくてはならないことは、プロジェクトを体験した学生がどのような知識や能力を身につけることができたのかということを明確にし、それをガイダンスや入門ゼミ等で学生に伝える必要があるということである。また、プロジェクトと科目の関連性を高めるため、各プロジェクトで必要とされる知識や技能を習得できる科目をリストアップし、それをプロジェクト学生に履修するように薦めることである。そうすることによって、プロジェクトの質も高まり、科目への関心も高まるという相乗効果が考えられる。

5.3 全学的な活動への展開

広島経済大学では『『ゼロから立ち上げる』興動人の育成』という教育目的を打ち立て、実社会で活躍できる能力を育てる3つの教育プログラムを設定している。その内容は、専門科目・共通科目・キャリア教育・能力開発科目といった幅広い分野を学び、社会人として必要な学識を養う基礎知識開発プログラム、ゼミ科目という少人数の演習授業で、自分を表現する能力を身につけるプレゼンテーション能力開発プログラム、興動館科目・興動館プロジェクトといった興動館教育プログラムによる実践を重視した4つの科目フィールドとプロジェクト活動で「人間力」を培う人間力開発プログラムである。この3つのプログラムを学生が実践することで、全学的に興動人を育てようというのが3つの教育プログラムであり、教育目的である。

全学的にこの教育目的を達成するために2つの方法が考えられる。一つは、それぞれの教育

プログラムの中で興動人を育成するプログラムを充実させることであり、もう一つは、興動館教育プログラムの自体の参加を促進するということである。前者は、興動館教育プログラム以外の教育プログラムのことが対象となり、本研究の趣旨と違ってくるのでここでの言及はしない。後者の興動館教育プログラムの参加の促進に関しては、多くの課題があるが、最も重要なのは学生へのアプローチである。考察2で触れたように学生は「活動内容への興味」があってプロジェクトに参加するケースが多い。しかし、実際には学生が詳しいプロジェクトの活動内容を知る機会があっても、自主的に活動内容を知ろうと動く学生は少ない。例えば、プロジェクトの終了時に開催される興動館プロジェクト活動報告会の参加者内訳をみると、プロジェクトに参加していない学生の割合は、1%にも満たない場合が多い。平成22年12月に開催された報告会では、323人中2人がプロジェクトメンバー以外の学生で、割合でいえば0.6%であった。このような状況の中、学生に興動館プロジェクトの活動を知ってもらうためには、ゼミを担当している教員や学生に携わる機会が多い部署に、活動報告会の学生の参加をさらに強く促してもらったり、イベントの最新情報を伝えたりして、お互いの連携を深めていく必要がある。

謝辞

2005年度から2010年度までに興動館プロジェクトに参加した学生の人数の推移のデータは、興動館の中山紘之氏にご提供頂きました。ここに感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) 経済産業省 (2007) 『『社会人基礎力』育成のスマー社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して—』
- 2) 広島経済大学興動館 (2011) 『『ゼロから立ち上げる興動人』—興動館教育プログラムのご案内 2011—』